東京学芸大学教育実践研究紀要　第19集　pp. 93-98，2023

小学校「特別の教科　道徳」における教職員の資質能力の向上に関する研究動向

―― 特別な配慮を必要とする児童への指導・支援の充実を視野に入れて ――

青木　利樹*・田中　亮**・奥住　秀之***

（2022年11月22日受理）

AOKI, T., TANAKA, R., and OKUZUMI, H.; Research Trends in the Improvement of Teachers' Competencies in "Special Subjects - Morality"at Elementary School: *With a View to Enhancing Guidance and Support for Children with Special Needs*.　ISSN 1349-9580

This paper presents a summary of research trends related to the improvement of teachers' qualifications for moral education, of improvement of moral education curricula and teaching methods, and of actual special support education situations. An important aspect of training to improve the qualifications of teachers for moral education is to broaden the range of ideas addressed in moral education. As a prerequisite of those improved qualifications, professionalism and continuity of training must be ensured. The moral education curriculum has demonstrated the need for implementation of a PDCA cycle to be followed in an organized manner. The need for detailed guidance, such as the preparation of an annual teaching plan and separate leaflets, was suggested. Furthermore, regarding teaching methods, innovations have been made in learning activities and class development so that students have become able to think about moral values as their own personal matter. The importance of guidance and support from the perspective of special support education in moral education was demonstrated in terms of both teaching methods and content. Guidance enhancement based on the environment surrounding the child, such as the state of difficulty and the child's history of upbringing, is necessary. The points explained above emphasize the importance of constructing a guidance system and opportunities to improve teaching quality and to provide learning that allows teachers and staff members to work on their own initiative and to contribute to effective and systematic quality improvement, in accordance with the school size, the teaching staff, the curriculum, educational issues, school culture, and other school environment factors. Moreover, future training in moral education that includes a perspective on special support education in moral education must be provided so that the teaching of children with developmental disabilities can be sustained and enhanced.

KEY WORDS : Elementary School, Special Subjects – Morality, Improvement of Quality and Ability, Developmental Disability

* *Ogawa Elementary School・Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University*
** *Kikkyo Elementary School・Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University*
*** *Department of Special Needs Education, Tokyo Gakugei University*

* 那珂川町立小川小学校・東京学芸大学大学院連合教育学研究科
** 塩尻市立桔梗小学校・東京学芸大学大学院連合教育学研究科
*** 東京学芸大学　特別支援科学講座

1．問題と目的

近年，グローバル化・情報化の急速な進展，多様性の尊重，人工知能や生命倫理など科学技術の進化に伴う新たな問題，環境問題や超少子高齢化を社会的な背景として，決まった正解のない予測困難な時代が到来したと言われている。教育現場においても，近年の教員の大量退職・大量採用等教員を巡る環境が大きく変化している。さらに，少子化により児童生徒が減少する中，特別支援教育を受ける児童生徒数が10年間で２倍になっているなど学校現場の課題が複雑化・多様化している。このような現状を受け，令和４年８月には文部科学省より「公立の小学校等の校長及び教員としての資質向上に関する策定に関する指針」が改訂されるなど教職員の資質向上が求められている（文部科学省，2022）。

ところで，学校教育の大きな変革のひとつとして，これまでの「道徳の時間」が2015年度に「特別の教科　道徳」（以下，道徳科）として教科化されたことが挙げられる。道徳科は，道徳教育の要として「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うこと」を目標とし，教科化に伴い，内容の体系化や検定教科書の導入，指導方法の改善，評価の導入がなされた（文部科学省，2018）。道徳科においても質的転換が求められるなど，教職員の資質能力向上が喫緊の課題となっている。

そこで本稿では，基盤となる教職員の資質能力向上の在り方についてまとめ、次に教職員の道徳科に係る資質能力向上の特徴を整理し、研修内容の具体である教育課程編成や指導・支援についてまとめる。そしてそれらを踏まえ，今後の道徳科に係る教職員の資質能力向上のあり方についての展望を検討することを目的とする。

2．教職員の資質能力向上に関する研究動向

まず，教職員の資質能力向上に関する研究動向についてまとめる。

令和４年８月の「公立の小学校等の校長及び教員としての資質向上に関する策定に関する指針」の改訂により，多様な専門性を有する質の高い教職員集団の構築を目指し，不断の資質の向上を図ることが求められた。具体的な教員の指標としては，①教職に必要な素養，②学習指導，③生徒指導，④特別な配慮や支援を必要とする子供への対応，⑤ICTや情報・教育データの利活用が挙げられ，資質能力向上を推進する体制の整備が喫緊の課題となっている（文部科学省，2022）。

秋田（2012）は，伝達行為を含みながら教師個人のそれぞれの良さを認め合ったり，そこから学び合ったりする形での校内研修モデルを報告している。その中での教師の学びの質は，浅い順から①受動的，②能動的，③相互作用的，④共同構成的へと４段階に深化することを報告している。①受動的とは「静かに参加しているが，関心は低い状態」，②能動的とは「意欲はありそれぞれに活発に感想や意見を発信して参加している状態」，③相互作用的とは「同僚の他の教師の視点を知ったり，相互の考えの相違の交流を示すことで個人に新たな理解が深まったり，より具体的に当該授業が捉えられたり，授業全般へのより深い理解や抽象化が生じている状態」，④共同構成的とは「授業の見方や評価において教員相互の差異や共通性にもとづき，その授業のあり方や教材内容についての吟味が参加した教師皆で共有されて，さらに検討に値する内容は何か，焦点化された課題の発見や吟味がなされ，次の授業の検討につながる自分たちの共通のことばや考え方，課題が生まれる状態」である。田中（2022）は，この秋田（2012）の教師の学びの質の深まりを「教職員の学びの質の深まりモデル」とし，それを基盤としたICT活用教育に関する校内研修の実践を報告している。田中は同論文で，その研修の成果が十分に出たことから，教職員の学びの深まりモデルを基盤としたICT活用教育に関する校内研修は専門性向上と校内体制構築につながることを示唆している。これまでの教職員の資質能力向上のあり方については，校務分掌の機構改革との一体化や国・県の研究指定等による変革の事例，運営の中心に研究を据える文化のある学校の事例に基づく特徴や成立要件に着目されることが多かった（町支・脇本，2020）。しかし，田中（2022）の実践は教職員の組織や会合の実施回数には大きな変更を加えず，研修の運用・実施方法を体系化し，工夫を凝らすことで充実を図ったものであるため，日常的な教職員の資質向上の機会の継続性を担保する上でも，この実践には大きな意義があると言えよう。教職員研修や校内研究の企画・運営にあたっては，学校文化の把握に合わせて計画的に行うことの重要性が指摘されており（姫野，2012），教職員の学びの質の深まりモデルを基盤とした他の教育課題の校内研修の実施が期待される。

3．道徳科に係る資質能力向上に関する教員のニーズ

次に，道徳科に係る資質能力向上に関する教員のニーズについての報告をまとめる。

１で述べたように道徳科の教科化により，検定教科書や指導要録への記述式の評価等が導入される等学習指導要領の内容がこれまでの「道徳の時間」から大幅改訂されたが，浅部（2019）は多くの教職員が道徳授業に対し

て，不安感を抱いていることを指摘している。吉井・藤本（2018）は，教員の道徳科に対する不安感について，検定教科書の使用や評価には不安を有しながらも一定理解している教員も多い一方で，道徳科の授業では何を教えるのかという指導内容について不安や困惑を抱く教職員の存在を指摘している。

また，谷口（2018）は小学校教員の道徳授業に対する感情として，「充実感」，「劣等感」，「不安感」の３つの心理次元が存在していることを指摘している。「不安感」は「難しい」，「不安」という感情を持ちながらも道徳科に向き合おうとしていることを示している。一方で，「苦しい」，「辛い」，「恥ずかしい」という「劣等感」が道徳科の授業を忌避する行動に作用していることを報告している。「不安感」を有している教員は，若手教員に多いことが指摘されており，初任者研修をはじめとする若手教員を対象とした研修での道徳科の扱いの重要性が窺える。この若手教員への道徳科に係る資質向上については，団塊世代の教員の大量退職とそれに伴う若手教員の大量採用との関連も考えられ，浅部（2022）は子供の「伴走者」として優れたファシリテート力を有するベテラン教職員の指導技術を若手教職員に伝達するシステムの構築の重要性を示唆している。

これらのことから，道徳科の教科化に伴う不安や困惑を抱く教職員の存在が推察され，学校現場で教職員が自信をもち，充実した道徳科指導を持続的に行うためには教職員の資質向上に関するシステムの構築が必要不可欠と言えよう。

４．教職員の道徳科に係る資質向上に関する研究動向

次に，道徳科に係る教職員の資質向上に関する研究をまとめる。

まず，道徳科に係る研修の内容に関する先行研究を見ると，佐々木（2022）は研修の量が十分でないことに加えて，道徳科の指導と評価に重点が置かれているものの，研修の質が不十分であることを指摘している。そこで，教職員が授業・指導をする際に効果的なイメージを持てるようにするために，「学習者の視点」を取り入れ，学習者として模擬授業を行う校内研修を提案している。教職員が学習者として「主体的で，対話的で，深い学び」や「物事を多面的・多角的に考える」，「道徳的価値の理解を自分との関わりで深める」ことを体験することで，学習者の立場から授業の見直しを行うことでき，さらに教職員役の同僚と協働的に省察を行うことができることを報告している。

森（2022）は，現実の問題に対処できる実効性のある道徳性を養うためには，子供たちを取り巻く現状と実態に即して，柔軟な発想で授業構想・改善を図っていく授業力の重要性を指摘している。具体的な授業力として①道徳科の指導と評価に関する基本事項を理解して教材を分析する力，②指導の要点と導き出したい子供の考えを明確にする力，③導き出したい子供の考えを引き出すために，子供の実態に即して必要な指導を構想・実践する力，④指導の要点に即して子供の考えとその変容を捉える力，⑤子供の姿から改善すべき指導上の課題を明確にする力の５つを挙げている。そしてこれらの授業力向上において，授業研究会は教員個人にとっても，学校全体としても有益な活動であり，授業力の向上の要であると述べている。また，森は授業研究会について，研修講師を招く専門性に特化したもののみでなく，専門性を備えたうえで，同僚と協働しながら授業改善の多様な方策を見出すことを繰り返すような継続性と協働性の担保を重要視している。

谷口（2020）は，OPPシート（One Page Portfolio シート）を使用した道徳科授業に関する校内研修の在り方について検討した。その中で，①教員自身が自ら学ぶ目的を明確にすること，②教員自身が校内研修を通した自身の学びを評価すること，③教員自身が校内研修を通して得られた学びの成果を実感することの３点が必要であり，OPPシートを使用した研修はこれらを導出することが可能であることを報告している。

これらのことから道徳科の授業研究等の研修の機会は，授業デザインそのものを考えることよりも「学習者の視点」や同僚との協働的な省察など授業者自身の道徳科指導における考えの幅を広げることが重要であると言えよう。その実現のためには「学習者の視点」のように教職員や発問を俯瞰することやOPPシートのような自身の研修の学びを省察することは効果的であると考えられ，そののちに子供の取り巻く環境や子供の実態に最適な指導を提供できるようになろう。そして，その前提として，研修の専門性と継続性の担保が求められる。

指導体制に関する先行研究を見てみると，飯塚（2022）は，道徳教育推進教師を中心とした指導体制の構築が不十分である可能性を指摘している。また，実働する機能的な指導体制の構築のためには，道徳教育推進教師が本来求められる位置づけや役割を踏まえた適切な校務分掌の調整，そのための学校管理職のリーダーシップの重要性を述べている。

また，木下（2022）は道徳教育推進教師に求められるものとして，教育課程全体を見渡す鳥瞰的な目（鳥の目）と授業隅々まで見取る目（蟻の目）を挙げており，教務担当の教諭等と連携した体制の必要性を指摘している。

さらに学期のはじめに公開授業を行うなど，全職員が授業イメージを共有できる工夫が必要であることを報告している。また，浅部（2019）は道徳教育を推進していくためには，道徳教育推進教師の資質向上が必要であることを指摘している。

これらのことから，道徳教育推進教師の求められる役割は大きいものの，十分機能していない現状が推察される。道徳教育を推進するうえでは，木下（2022）の指摘するように校長をはじめ授業を行う学級担任，教育課程をマネジメントする教務担当の教諭等と連携を図ることが重要である。そのためには，道徳教育推進教師のおかれている環境も踏まえ，校務分掌の整備・見直しも必要であろう。さらに，道徳教育推進教師の資質向上を図る研修の設定が求められる。

５．教育課程編成・指導法改善に向けた研究動向

2015年度に道徳科が教科化されて以降，「考える道徳」「議論する道徳」の実現に向けて様々な研究が行われている。

毛内（2022）は主体的・対話的で深い学びのある道徳授業の実現のためには，計画から授業実施，評価，そして改善までを１つのサイクルと捉えるPDCAサイクルの実現の重要性を指摘している。毛内はそれぞれの段階で重要であることを報告しており，「P」（道徳授業の計画）では学校・家庭・地域社会の実態から育てたい児童の姿を明確にし，道徳教育の重点目標や重点的に指導する内容項目を設定し，全体計画や別葉等指導計画を立て，全ての教職員で共通理解すること，「D」（道徳授業の授業実践）では，１単位時間の中に①道徳的価値の理解，②自己を見つめる学習，③多面的・多角的に考える学習，④人間としての生き方について考える学習の４つの学習を含むこと，「C」（道徳授業の評価）では，「道徳科の授業に対する評価」と「道徳科の授業で見取る子どもの評価」の２つの視点をもち一体的に捉えること，「A」（道徳授業の改善）では，評価を基に教職員で共通理解を図りながら，校内研修等で理解を深め，チーム学校としてより質の高い道徳授業に改善することを重点としている。また，中野（2020）はPDCAサイクルでは短い期間での改善に対応できないことを問題視し，年間指導計画の他に学期や単元ごとの指導計画を設定し，修正が必要な際にこまめに計画を見直すようなカリキュラム・マネジメントを提案している。このように，道徳科授業の質の向上のためには個人の実態はもちろんであるが，学校や家庭，地域社会の実態も踏まえ，意図的・組織的な教育課程の位置づけが重要である。

また，領域時代には読み物教材の登場人物の心情読み取りを中心とした指導法が多く，道徳授業の課題として挙げられていたが，道徳科が教科化され，指導方法の改善の研究も行われている。木下（2021）は読み物教材の登場人物への自我関与中心の学習を取り上げている。問題意識をもつための導入を工夫し，役割演技や対話活動などの言語活動を取り入れ，適切な発問をすることで，単なる心情の読み取りではなく，登場人物を自分との関わりの中で考えることができ，道徳的価値について考えを深めることができると報告している。また，2019年12月に打ち出されたGIGAスクール構想との関連を図る指導も検討されており，幸阪（2021）はICT機器を活用した授業実践の報告を行っている。幸阪はICT機器を，コミュニケーションを促すツールとして使用し，言葉の可視化による問題意識の共有や情報の共有から自己の振り返りの深化を可能にしたことを報告している。このように道徳科では児童が道徳科の目標を達成できるよう授業展開や学習活動，発問，教材等の工夫が求められている。

６．特別な配慮や支援を必要とする児童生徒への道徳科指導・支援の充実に向けた研究動向

最後に，「公立の小学校等の校長及び教員としての資質向上に関する策定に関する指針」の具体的な教員の指標の１つに「特別な配慮や支援を必要とする子供への対応」が挙げられたが，道徳科で求められている発達障害等のある児童への対応についてまとめる。

小学校学習指導要領解説「特別の教科　道徳編」には，「発達障害等のある児童に対する指導や評価を行う上では，それぞれの学習の過程で考えられる『困難さの状態』をしっかりと把握したうえで必要な配慮が求められる。」と記述されており（文部科学省，2018），具体的な児童生徒の困難や指導上の工夫についても，道徳科が教科化されるにあたり示された「『特別の教科　道徳』の指導方法・評価等について（報告）」に記載されている（文部科学省，2016）。

道徳科における発達障害等のある児童への配慮・支援についての先行研究を見てみると，指導方法については，青木・田中・奥住（2021）は，道徳科での指導上の工夫は他教科等と同様に行われるものが多い中で，気持ちの変化を図や矢印などで視覚的に示す支援が道徳科で特に行われていることを報告している。また，青木（2022a）は，道徳科における授業のユニバーサルデザイン化やクラススタンダードを含む学級全体に対して行うクラスワイドな支援の特徴について言及している。道徳科のクラスワイドな支援の特徴として，多様な学習活動の取り入

れや授業規律の設定等全ての児童が道徳的価値について迫れるような学習活動の工夫と検定教科書の導入に伴う教材提示の工夫の２点を報告している。青木（2022b）は発達障害のある児童であっても，適切な指導上の工夫を行うことで，授業促進を促進し，自身の考えを道徳的価値に基づき考えることができたり，他者の考えの存在に気付くことができたりすることを報告している。また，吉田・友永・高橋・石川・鈴木（2020）は，自閉症スペクトラム障害傾向のある児童に対して，通級による指導を模した形での個別の道徳科授業の実践を報告している。個別の指導を行うことで，一斉の指導では見取ることの難しい困難の状態を的確に見取ることができ，最適なアプローチを選択できることを報告している。また，指導内容についても，青木・奥住・大井（2021）が学習障害等発達障害のある児童への特別な指導内容と道徳科の内容項目とで関りがある項目もあることから，学びの連続性を担保した指導を図ることが重要であるとしている。

これらのことから指導方法と指導内容の両方の側面から指導・支援のあり方を検討する必要があろう。また，青木・田中・大井・奥住・小林（2021）では通常の学級における病気のある児童への道徳科指導の際には成育歴等による心理的配慮が必要であること，障害の種類による配慮事項の差異があることを述べており，障害のある児童を取り巻く環境の理解についても重要であることが推察される。

７．今後の道徳科における教職員の資質能力向上のあり方

本稿では，道徳科に係る教職員の資質能力向上に関する研究動向や道徳科の教育課程や指導法改善，特別支援教育の視点をまとめた。

教職員の道徳科に係る資質向上を図るための研修の重要な点として，子供の取り巻く環境や子供の実態に最適な指導を提供するために，「学習者の視点」や同僚との協働的な省察など授業者自身の道徳科指導における考えの幅を広げることが考え，その前提として研修の専門性と継続性の担保が求められる。

また，道徳科の教育課程では指導と評価の一体化を図るPDCAサイクルが組織的に行われる必要性が示された。年間指導計画や別葉はもちろんであるが，学期ごと単元ごとの指導計画を立てるなど，きめ細やかな指導の必要性が示唆された。また，指導方法においても，領域時代の課題を克服し，児童が道徳的価値について自分事として考えられよう学習活動や授業展開等の工夫が行われていた。

道徳科における特別支援教育の視点については指導方法と指導内容の両方の側面から指導・支援のあり方の重要性が示された。困難の状態や児童の成育歴等児童を取り囲む環境を踏まえた指導の充実が求められる。

これらを踏まえて，今後の道徳科に係る教職員資質能力向上の展望をまとめる。教職員の資質能力向上が求められる中，道徳科に係る資質能力向上の機会が日々推進されていることが推察された。一方で，道徳教育推進教師を中心に添えた指導体制が不十分であることなど，学校間による差も考えられる。校務分掌の見直しや校内での道徳教育推進教師の位置づけや役割の見直しも重要であるが，田中（2022）の実践のように学校規模や構成する教職員あるいは各校の教育課程・教育課題・学校風土等に合わせ，教職員が主体性をもって取り組むことができ，効果的・体系的な資質向上に資するような指導体制及び資質能力向上の機会を構築することが重要であろう。また今後は，道徳教育の中で発達障害のある児童への指導が持続的に充実するよう道徳科における特別支援教育の視点についても言及するような道徳科の研修が求められる。

引用文献

青木利樹（2022a）小学校「特別の教科　道徳」におけるクラスワイドな支援の特徴．道徳と教育，340，27-38.

青木利樹（2022b）小学校道徳科における発達障害のある児童への配慮・支援―成果・課題から見る協働的な学びの構築の今後の展望―．未来を拓く教育実践学研究，6，156-165.

青木利樹・田中亮・奥住秀之（2021）小学校「特別の教科 道徳」における発達障害児及びその傾向のある児童への指導上の工夫・配慮．東京学芸大学紀要，総合教育科学系，72，217-224.

青木利樹・田中亮・大井雄平・奥住秀之・小林巌（2021）小学校「特別の教科　道徳」における病気の児童への指導の成果と課題―心理的な支援を視野に入れて―．東京学芸大学教育実践研究，17．17-23.

青木利樹・奥住秀之・大井雄平（2021）小学校道徳科における発達障害児への特別な指導内容―「障害のある子供の教育支援の手引」と道徳科の内容項目との関連―．教育実践報告誌，5（1），34-41.

秋田喜代美（2012）学びの心理学―授業をデザインする―．左右社.

浅部航太（2019）道徳教育推進教師に求められる資質・能力と効果的な推進の在り方に関する研究．道徳と教

育．337，27−38.
浅部航太（2022）道徳科の一層の質的充実に向けて．道徳と教育，341，109−112.
姫野完治（2012）校内授業研究を推進する学校組織と教師文化に関する研究．秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要，34，157−167.
飯塚秀彦（2022）初等中等教育における道徳教育の現状と課題．道徳と教育，35−38.
木下美紀（2021）共感的な視点を生かして生き方を深める道徳授業．日本道徳教育学会全集編集委員会（編）幼稚園，小学校における新しい道徳教育　学文社，93−.100.
木下美紀（2022）道徳教育の実践上の課題―学校の実態・実施状況を踏まえて課題を検討する―．道徳と教育．341，117−120.
幸阪創平（2021）道徳科の主体的・対話的で深い学びを促すICTの活用とその学習効果に関する一考察．道徳と教育，339，71−83.
町支大祐・脇本健弘（2020）校内研究の効果とその要因に関する検討―効果レベルによる要因の相違に着目して―．教育デザイン研究，11，180−187.
文部科学省（2016）「『特別の教科 道徳』の指導方法・評価等について（報告）」.
https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2016/08/15/1375482_2.pdf.（2022年11月18日）.
文部科学省（2018）小学校学習指導要領「特別の教科 道徳編」.
文部科学省（2019）GIGAスクール構想の実現へ.
https://www.mext.go.jp/content/20200625-mxt_syoto01-000003278_1.pdf.（2022年11月18日）.
文部科学省（2022）公立の小学校等の校長及び教員としての資質向上に関する策定に関する指針.
https://www.mext.go.jp/content/20220901-mxt_kyoikujinzai01-000023812_1.pdf.（2022年11月18日）
毛内嘉威（2022）道徳教育の現状と課題―道徳授業のPDCAサイクルの実現―．道徳と教育，341，99−100.
森有希（2022）今求められる道徳科の学びを実現するための教員の授業力向上―道徳科の指導と評価に関する協働的な授業研究の試み―．道徳と教育，340，75−86.
中野真悟（2020）年間指導計画のカリキュラム・マネジメントに関する組織学習．道徳と教育，338，15−26.
佐々木篤史（2022）学習者に「なってみる」ことで深める校内研修を．道徳と教育，341，123−126.
田中亮（2022）教職員の学びの質の深まりモデルを基盤としたICT活用教育に関する校内研究の実践―GIGAスクール構想下における指導法改善・教育課程編成に向けて―．未来を拓く教育実践学研究，6，136−145.
谷口雄一（2018）小学校教員の道徳授業に対する感情と認知，行動．道徳と教育，336，75−88.
谷口雄一（2020）道徳授業に関する校内研修の在り方についての一考察―OPPシートによる自己評価の機会の創造―．道徳と教育，338，53−64.
吉田ゆり・友永光幸・高橋甲介・石川衣紀・鈴木保巳（2020）発達障害の可能性のある児童の教科「道徳」における教育実践―内容の読み取りに焦点化した支援事例―」．長崎大学教育学部教育実践研究紀要，19，101−111.
吉井伊久雄・藤本文朗（2018）「特別の教科 道徳」に戸惑う教員―自信を持って授業を展開するために―．滋賀大学教育学部附属教育実践総合センター紀要，26，7−14.